続　分相応に風が吹く

上　月　　明

新春の祝い行事も終わり静寂とした事務所で、松崎龍二は特別養護老人ホームの経理帳簿を見ていた。自席の椅子をゆっくり半回転させ、窓から利用者の憩い場所である芝生が貼られた広場に視線を移す。車椅子に乗った利用者たちが、にこやかな笑顔を見せ、介護職員に連れられて日なたぼっこをしていた。

昨年の十二月一日、龍二は事務長という立場から、利用者への虐待防止という大義名分をもって、村津を年度途中にもかかわらず強引に、介護課からデイサービス部署へ異動させた。デイサービスは夜勤がなく給料が減るから、介護課に残りたいと懇願する村津を無視した。

立場の弱い者をいじめてしまった気持ちが拭いきれない。虐待防止のために行った人事異動。龍二は間違ったことを、やったとは思わないが、気分が晴れない。

そんな気持ちをナナミで紛らわそうと、会員クラブに電話を入れたが、彼女は十二月から休んで出勤していなかった。

会員クラブであるココナッツクラブは、若い女性と店内の個室で、援助交際ができる仕組みになっている。限られた時間の中で、恋愛のまねごとをして楽しむのである。

六十歳を過ぎた龍二には、セックスだけを求める遊びよりも、若い女性とのデートのまねごとは、新鮮であり人生に刺激を与えてくれる。ひいては仕事へのエネルギー源となる。

ナナミが会員クラブに出勤していないか、何回も携帯画面で出勤予定者を確認したが、彼女の文字を見つけることはできなかった。

龍二は立ち上がると、職員駐車場に置いてあるマイカーから、

携帯で会員クラブに電話を入れた。彼女との繋がりは店しかない。
「ナナミさん、最近出勤していないのですが、次の出勤予定日を教えていただけますか」
「ナナミさんは辞められました」
男性店員の言葉は、何の感情も入っていない事務的な言い方だった。今まで心の中で盛り上がっていたものが、潰れて流れ出していった。
「ナナミさんとの連絡方法はありませんか」
駄目なことはわかっていた。それでも数パーセントの可能性があればとの気持ちだった。
「当店の女の子の個人情報は一切お答えできません。失礼します」
そう言って電話を切られてしまった。
龍二は事務所に戻ると、職員の視線を感じた。背筋を伸ばしナナミの面影を振り切り、経理帳簿に目線を落とした。
突然、机上の電話に内線の呼び出し音が鳴った。ナンバーディスプレイに発信元の番号が出ていた。施設長室からである。
「はい、松崎です」
「施設長室に来てくれないか」
いつものことである。時間をもてあますと、事務長を呼んで経営理論を話すのである。またかの心境だった。立ち上がり二階の施設長室に向かった。
施設長室に入ると、施設長はソファーに座っていた。目の前に座るよう勧めた。
龍二は施設長の表情を窺いながら、ソファーに腰を沈めた。
「今年度の経常収支はどうなっているかね」
施設長の言葉にうなずきながら、どう返答するか迷った。施設の大規模修繕費を含めれば赤字になっていた。しかし、赤字とは言えない。赤字と言えば激怒されるのは目に見えている。「会社が赤字を出せば、信用を落とし取引先から相手にされなくなる」とは、施設長の普段からの口癖である。商売人を父親に持つ施設

長は、赤字という言葉に対し過剰に反応する。社会福祉法人だから株式会社とは違って、赤字に対する考え方を改めてもいいのではないかと思うのだが、施設長は聞く耳を持たない。

「まだ、決算をしておりませんので、見込額となります。今年度の事業決算見込みは、介護保険収入から、人件費や諸経費を差し引いて、約三千五百万円の黒字です」

事業収支だけなら黒字だから、嘘は言っていないと龍二は自分に言い聞かせた。

「昨年より一千万円ほど減っているようだが、どういうことなんだね」

施設長は顔をしかめた。機嫌が悪くなったのが表情でわかる。この場をどう切り抜けるか。龍二は頭の中で湧き出る不安な気持ちを抑えて、冷静を装った。

「今年度から、介護保険の加算基準が厳しくなり、介護報酬が減らされています。それに病院へ入院される利用者が、昨年より増えています。それらが原因と思われます」

「一千万円の減額を考えると、それだけではないだろう。人件費比率はどうなんだ」

龍二はどきっとした。経理帳簿から人件費が増加していると思い、人件費比率を検算したところだった。

「六十七パーセントです」

「数字だけではわからないではないか。多いのか、少ないのかを聞いているんだよ」

施設長はさらに追求してくる。

「社会福祉法人の人件費比率は全国平均で六十五パーセントです。全国平均より、少し高いと認識しておりますが、これは毎年定昇アップが必要ですので、やむを得ないと思っております」

「職員の質はどうなんだ」

施設長は矢継ぎ早に質問してきた。こちらが返答に詰まると、渋い表情になる。

「普通だと思っております」
龍二は言い切った。おどおどした自信のない態度を見せると、事務長としての評価が下がってしまう。ここは踏ん張りどころである。
「もっと具体的に言いなさい」
「はあ……」
言葉に詰まってしまった。事業収支は黒字なんだから、文句ないだろうが。そんな言葉が頭に浮かび上がる。
「事務長は職員の人材構成についてもっと勉強するんだ。人材とは、財産の人財。材料の人材。存在の人在。罪人の人罪の四種類に分けることができる。今言った四種類の比率が大事なんだ。理想は、自分で考えて、指示がなくてもてきぱきと働く人財が二割。上司の指示を理解して働く人材が四割。安全確認や見守りのために役立つ人在が四割。仕事の足を引っ張る人罪は無しの方がよい。私の言っていることが理解できるかね」
「おおむね理解できます」
「おおむねでは困るんだ。私の言っていることを、すべて理解して、それを施設経営に生かしてほしいんだよ」
施設長の視線が、龍二を睨み付けていた。
「承知いたしました。職員研修や職員の採用に当たっては、施設長が言われましたことを、念頭において進めてまいります」
龍二は言い終わった後、施設長に軽く頭を下げた。
「よろしく頼むよ」
龍二は施設長室を出たときに、大きな溜息をついた。これも給料のうちと、気持ちを切り替えた。腕時計を見る。在室時間は一時間。無駄に思えたが、施設長の機嫌を損なわない対応も、事務長の役目である。
事務所に戻ったときに、窓越しに玄関で人の気配を感じ、何となしに向けた視線の先を見て、
「あ！」と、口から声が飛び出してしまった。

あの横顔はナナミではないのか。この施設になぜ彼女が来ているのか。それとも人違いか。黒っぽい地味なワンピース。服装から二十代前半の女性とは見えないが、横顔の輪郭、髪の長さ、小柄でスリムな体型、彼女である条件は揃っている。

顔をもう一度見ようとしたが、事務所からでは小窓の縁が邪魔になった。玄関の自動ドアが開き、出て行く女性の後ろ姿しか見ることができない。

「どうかされたんですか」

総務課長の道中が声をかけてきた。龍二は彼の声で出鼻を挫かれてしまった。

「いや、何でもない。知っている人に似ていたもんだから、少し気になって……」

龍二は、彼女の前まで走り寄り、ナナミかどうか確認したい気持ちであったが、間違っていたら恥をかくし、もしナナミだったら、どう対応すればいいのか迷う。

職員たちは事務長の行動に注目している。若い女性を追いかける姿を見せれば、今まで職員に隠していた裏の部分が暴露されてしまう気がして、それ以上の行動に移せなかった。

「課長、今玄関を出て行かれた来客の女性は、どのような用件で来られたのか」

龍二は自席につくと冷静を装い、道中に問いかけた。

「入所施設を探しているとのことで、施設見学と入所概要を聞きたいと来られたみたいで、入所申込みの書類を持って帰られました」

「来られた方の名前は、何というんだ」

「そこまでは確認しておりません。入所希望者との面談は、伊藤相談員が行っております。事務所に呼びますか」

「呼んでくれ。知っている友人の娘さんに似ていたんで、少し気になったんだ。個人情報に関わるんで、ロビーの面談室を使うことにするよ」

龍二は自分の喋り方が、言い訳じみていることに苦笑した。道中は電話機から、伊藤が持ち歩いている施設内用のＰＨＳで呼び出した。

「伊藤君。事務長が先ほど来られた入所希望者の件で、聞きたいことがあると言われている。そう若い娘さん。面談記録を持って、ロビーの相談室まで来てほしいとのことだ。すぐにね」

龍二は、机の上に置いてあるコーヒーを一口飲んで、気持ちを落ち着かせた。ロビーには人影はなかった。相談室に入ると伊藤が待っていた。向かいの席に座ると、彼は龍二に軽く会釈をした。

「忙しいところ呼んだりして、すまないね」

ナナミかも知れない女性のことを聞き出そうとする気持ちが、伊藤に対して低姿勢にさせてしまう。

「課長から聞きましたが、先ほど施設見学に来られた方ですが、祖母を入所させたいと、お孫さんが来られました。他の施設も見学されているそうで、入所費用とか、面会時間とか、それに看取りまでしてもらえるのか、とかを聞かれました。施設内を見学され、入所の申込書類を持って帰られました」

伊藤の言葉を聞きながら、彼女の名前も住所も出てこないことに、がっかりした。

「お孫さんは、どこの方」

彼女のことを、龍二の方から聞くしかなかった。

「神戸市の方でした。神戸市内の特養は満床で、こちらの施設を見に来られたみたいです」

「名前は何という方」

龍二は伊藤の言葉を聞きのがさないように、耳を澄ませた。

「入所希望者の名前は北条菊野さんと言われましたが、お孫さんの名前は聞いていません。北条菊野さんの一人息子は亡くなられたみたいで、入所になるとキーパーソンはお孫さんになると思います」

龍二はうなずいた。ナナミが本名でないことはわかっていた。

彼女の姓は北条かもしれない。申込書類を持って帰ったから、提出してくる可能性はある。

「歳は」

龍二の問いに、伊藤は面談記録に視線を落とした。

「八十二歳です」

龍二は考え込む仕草をした。会員クラブでナナミは二十二歳となっていたが、容姿からしてほぼ間違いないだろう。祖母との年齢差が六十歳だから、孫としての計算は合うことになる。

「連絡先を聞いているかね」

龍二は、口元が引っかかりそうになったが、何とか自然に言えた。伊藤の口元だけを注目した。

「そこまでは聞いてません。まだ入所申込みをされるかどうかわかりませんから」

張っていた肩の力が抜けた。無表情で返答してくる伊藤に対して、無性に腹が立ってくる。

「君は五年も相談員をやっていて、どんな対応をしているんだ。入所させても手のかからない対象者なら、少しでも多くの情報を仕入れておくんだ。急に欠員が生じたときのために、連絡先ぐらい聞いておけ！」

龍二は怒鳴ってから、しまったと思った。こんな暴言を吐いていたら、部下たちの気持ちは龍二から離れてしまうだろう。

「申し訳ありません」

伊藤は反論してこない。素直に謝る姿勢を示した。

「職務に戻ってくれたまえ」

龍二は、伊藤が相談室を出て行くのを見送った。後味が悪い。玄関で見かけた彼女の後ろ姿を思い描いた。

こんなにナナミのことで動揺するなら、追いかけて本人かどうか確認すべきではなかったのか。それを確認できなかった苛つきを、部下に投げつけて事務長が務まるのか。こんなことで職員が付いてきてくれるのか。そんな動揺とも不安とも取れる思いが、

身体中に染み込む。

特別養護老人ホームはどこも満床である。空き待ちとなり、他の施設と比較して良い施設と思えば、複数の施設へ申込書類を出すのは常識である。複数の施設に申し込みをしたとしても、必ずその書類には入所者である北条菊野のキーパーソンとして、身元引受人の連絡先を書いているはずである。

ナナミから申し込みであれば、事務長の職権を行使してでも、入所させてやる。たとえ満床であったとしても、入所させる方法はある。短期間預かるショートステイを連続何回も繰り返せば、入所しているのと実質は代わらない。

連絡が取れるところにナナミを置いておきたい。話ができる位置にいてくれるだけでいいのだ。経済的に困っているなら、援助してあげてもいい。スリムな身体には着物が似合いそうだ。買ってやりたい。着物姿の彼女とツーショットの写真を撮るのもいい……。自分自身への最高のプレゼントになる。

そんなことを考えていると、妻の顔が浮かんだ。やりつけない行動に出て、妻が知れば揉めるだろう。普段は日常に必要な言葉しか交わさないが、離婚となれば毎日の生活に困ってしまう。

六十歳を過ぎた男が、妻と別れて一人暮しとなると、炊事洗濯はできない。日に三度の食事を外食だと、栄養のバランスが狂い病気になってしまう。衣類は毎日洗濯しなければならない。汚れたシャツを着て職場に行けない。女子職員は襟の汚れなどには敏感である。そんな身勝手な思いが全身を包む。いろいろ考えると疲れてくる。

龍二は相談室の椅子からゆっくり立ち上がると、事務所に戻った。

「事務長、先ほどの件はどうでした。お知り合いの方でしたか」

道中が声をかけてきた。

「まだ、相手は入所申込書を出すとは言わなかったらしい。詳しいことは聞いてなくて、わからなかったよ」

龍二は書類に目を通す仕草をし、ナナミの件については言葉を濁した。
「そうでしたか」
道中は、何か言いたそうだったが、龍二の態度を見て離れていった。

ナナミらしき女性の後ろ姿を見てから一週間が経っていた。
「事務長、大変なことが起こりました。村津がやってしまいました」
事務所に飛び込んできた道中は、龍二の座っている机の前にやってくると、周囲の職員に聞こえないように、小声で話した。
「やってしまったって、まさか虐待？」
「デイサービス部署の今井課長によると、通所している利用者の家族から、村津に対し苦情が入ったとのことです。何でも、利用者を送って行って、車両から降りるときに、乱暴なやり方だったので、利用者が転げて尻餅をついてしまったようです」
「ただの事故ではないのか」
道中の説明では、事故の内容が、もう一つわかりにくかった。
「村津の乱暴な態度から生じた事故だと、家族が訴えているそうです」
「利用者は、誰なのだ」
「帆足さんです」
「それでケガの状態はどうなのだ」
龍二は不安が高まってきた。事故の処理には相手側にもよるが、時間と大きなエネルギーを費やさなければならない。
「帆足さんがお尻が痛いということで、家族が救急車を呼んで近くの病院に行って、レントゲンを撮ってもらったら、尾てい骨にひびが入っていたとのことです。村津の行動を家族が見ていて、今井課長に苦情の電話があったそうです」
「それで今井君は、病院に見舞いに行っているのか」

こちらが加害者なら、早く被害者に出会って誠意を見せなければならない。

「今、話を聞いたとこですから、まだです」

「何をしているんだ。こういうときは、一刻も早く謝りに行くんだ。村津を連れて行くといいんだが、村津が横柄な態度でも見せれば、家族も感情的になって話が大きくなる。ここは現場の責任者である今井君だけでは心細いだろうから、道中課長も一緒に行ってやってくれないか。それからわかっているだろうが、こちらに落ち度があるなら、入院費はもちろんのこと、退院後自宅での介護が大変なら、うちに入所してもらって世話をしてもいいと、譲歩するんだ。頼んだよ」

「わかりました。では早速、今井課長と行ってきます」

そう言って、事務所を出て行く道中の後ろ姿を見送る。てきぱきと指示通り動いてくれる道中は人財だと思った。

龍二は椅子に身を深く沈めた。反転させると窓から敷地内の芝生広場が見える。冬なので葉は枯れて茶色になっていた。利用者がひなたぼっこしているときは感じなかったが、誰もいない茶色い芝生が陰気な風景を誘う。

やっかいな問題が浮上した。はっきりした原因はわからないが、このままでは済まされない。何か手を打たなければと気が急く。

道中から連絡が入れば、ケガをした利用者の状況を施設長に報告をしなければならない。それを考えると、急に気持ちが重くなる。

ナナミの顔が浮かぶ。逢って話をするだけで気持ちが癒やされる。不思議な女性だとも思う。風俗の会員クラブでバイトをしていたが、不潔な感じを与えない。爽やかな清潔感が滲み出ている。

平日は派遣会社に籍を置き、病院で医療事務をしていると言っていた。微笑むと両方の頬にできるえくぼ、口元から覗く八重歯、パッチリとした目、年齢は二十二歳。スリムな身体からフェロモンがほとばしっている。龍二は六十二歳という身体と比較し、落

胆を覚えることもあるが、若いエネルギーを吸収しているようにも思える。

先日、施設を訪れたのは、ナナミ本人であったのだろうか。何回考えても、あのとき彼女を追いかけて、顔を確認すべきであったと悔いが残る。

事務所内を見渡すと、六人いる職員が、ただ黙って自分に与えられた職務をこつこつとこなしている。女性職員とは、ほとんど私的な話はしない。口を滑らせて助平な話でもしようものなら、セクハラ問題に発展する可能性だってある。『雄弁は銀、沈黙は金』という、ことわざを反復することにしていた。

事務所の電話が鳴り、ナンバーデスプレイに道中の携帯番号が映し出された。龍二は机上の受話器を取る。

「道中です。帆足さんの尾てい骨にひびが入っていますが、ドクターから二日ほどで退院してよいとの返事でした。部位が尾てい骨ですので、自然治癒を待つしかないようです。病院のベッドで寝ているよりは、家で少し動いていた方が筋肉が弱らずいいとのことでした。家族の心情ですが、事務長に言われたように、低姿勢で謝ったおかげで何とか済みそうです。ただし村津は帆足さんの担当から外し、元気になったら今まで通りショートステイに行けること、介護度が進んだら優先的に入所させることで、納得してもらいました。病院代は施設で負担すると言っております」

道中のほっとした気持ちが、電話口まで伝わってくる。

「それは良かった。大役を済ませて疲れているとは思うが、施設に帰ってきたら、今井課長に村津を連れて、三階の会議室まで来るように言ってくれないか。道中課長も同席を頼むよ。今回の件では、うまくいって、助かったよ。ご苦労さん」

龍二は、道中にねぎらいの言葉をかけ、受話器を置いた。状況を把握してからだが、村津の処分をどうするかだ。昨年の十二月に夜勤のないデイサービス部署に異動させたばかりである。新しい職場でも利用者に対する虐待の疑われる態度が改められないの

なら、何らかの対応をしなければならない。
村津の態度は施設長が言っている人罪に当たる。解雇したいが、本人は同意しないだろう。無理矢理解雇すれば、どんな行動に出るかわからない。労働監督署に不当解雇だと訴えられたら、監査に入られ指導を受けることだって考えられる。
一番いい形は、自主退職してくれればいいのだが、そんなに簡単にいくものではない。とりあえずは、注意することしかあるまい。
玄関の自動ドアが開き、道中課長と今井課長が帰ってきたのがわかった。
「今から、村津君を連れて今井課長と一緒に、三階の会議室に行っておりますので、十五分ほど経ったら来てください」
道中が、玄関の受付窓口から声をかけてきた。
龍二は事務長という職責について、因果な役職だと思った。人罪と思われる職員を、本人が嫌う部署に異動させ、依願という名を借りて自主退職に持っていくように仕向ける行為に、気持ちが晴れない。左うちわで事務長席に座っていられたら、どんなに楽だろうか。
ゆっくり立ち上がると、三階の会議室に向かった。階段を上がりながら、村津にどう対応するべきか迷う。まだ結論は出ていない。村津の言い分を聞いてからでも遅くはない。
会議室に入ると、呼んでいた三人がすでに会議テーブルを挟んで座っていた。入り口側に、今井課長と村津が、奥の窓際には道中課長が座っている。
道中の横に腰を下ろし、座っている村津と向かい合う形になった。相変わらず髪は伸び、髭を剃っていなかった。
「早速だが、ここに来てもらったのは、わかっているだろうが、帆足さんの件だ。まず村津君から状況を説明してもらおうか」
龍二は、村津の顔を睨むようにして言った。
「家までデイ送迎車で送って行き、帆足さんが車から降りようと

したときに、バランスを崩されて尻餅をついてしまいました」
村津は、おどおどした言い方であった。
「君はどこにいたんだ。利用者がバランスを崩しそうになれば、側にいて支えてやるのが、デイ送迎をしている者の務めだろうが」
龍二の口調が強くなった。
「僕が運転席から降りて、助手席側に向かおうとしたとき、帆足さんは勝手にドアを開けて降りようとして、転んだんです。手を貸すと帆足さんは立ち上がり、そのとき『大丈夫』と言ったんです。家族も家の中から出てくる途中でした。家族から何も言われませんでしたので、帆足さんを家族に引き継いで帰ってきました。僕は精一杯やりました。今回はたまたまの事故です」
村津は睨み返してきた。
「何が精一杯だ。利用者を降ろすときは、細心の注意を払うものだ。助手席側のドアをロックしておくとか、自分でドアを開けないように事前に言い聞かせておくとかをするものだ。それに本気で仕事をしていたら、相手から苦情の電話なんか来ないんだよ。帆足さんからの担当は外れてもらう。わかっているだろうが、これだけ問題を大きくした事に対して、どう責任を取るつもりなんだ」
龍二は、村津の反省を見せない言い方に腹が立った。
「責任を取れとは、どういう意味ですか。その言い方はパワハラではないですか。労働監督署に訴えてもいいんですか」
村津も負けてはいない。
「まあまあ、穏便に話しましょう」
二人のやりとりを聞いていた道中が、中に入ってきた。
「十二月のデイサービスへの異動の件は、忘れていませんから」
村津はなおも突っかかってくる。
「この施設では、働かない人間はいらないんだ」
龍二は言い返してから、感情的になっていることを覚えた。管理職として失格であることを悟ると、次の言葉が出てこなかった。

「クビに出来るなら、やってくださいよ。僕は抵抗しますから」
村津も引き下がらない。
「今日はこれくらいで、やめましょう」
道中課長が口を挟んだ。龍二は道中に向かってうなずく仕草を見せた。
「村津君は、もう帰っていいよ」
道中課長の言葉を聞いて、村津は会議室を出て行った。
「済まなかった。少し言い方がまずかったみたいだ。二人には、村津君にどう対応したらいいか考えておいてほしい。それと今井課長には、当面村津君の行動には気を付けて、何かあれば報告するように。頼むよ」
龍二はそう言って、その場の矛を収めた。
階段で二階まで降りたとき、施設長に現状を報告するか迷った。村津にどう対処するか結論は出ていない。結果を出してから報告するのがベストだが、帆足さんの家族から苦情が施設に入っている以上、いつ施設長の耳に入るかわからない。その前に報告をしなければ叱責を受けかねない。
龍二は立ち止まり、施設長室に向かって歩いた。ドアの前に立つと、鼓動が速くなり緊張しているのがわかる。ゆっくりとドアをノックした。
中に入ると、施設長は机に向かって書き物をしていた。いつものようにソファーの横に立った。施設長との視線が合うのを待ってから、「少しお話が……」
施設長は、老眼鏡を外すと席を立ち、ソファーに腰を下ろした。それを見届けてから龍二も向かいに座った。
「どうしたんだね」
トーンの低い声がズシッと響いてくる。
「昨年の十二月にデイサービス部署に異動させた村津君が、利用者の帆足さんを送迎していて、帆足さんが車から降りられるときに介助の仕方が悪かったらしく、尻餅をつき、尾てい骨にひびが

入るという事故を起こしてしまいました」
「そのときの村津君の対応を、もう少し具体的に説明をしてくれないか」
施設長は、ゆっくりした口調で、聞き返してきた。
「村津君が運転席から降りて、手助けする前に帆足さんが勝手にドアを開けて転んだそうです。尻餅をついたときは、手を貸すとすぐに立ち上がられたので、そのときはケガも無いと思い、家族に引き継ぎそのまま帰ってきたらしいのです。その後帆足さんが、家族の方に痛い痛いと言われるので、救急車で病院へ行ったら尾てい骨にひびが入っていたということです。家族から立腹の電話がありました」
「施設側の対応はどうしたんだね」
龍二は、施設長の表情が徐々に曇っていくのを感じ取った。
「家族からの電話は今井課長が受けております。家族の方が感情的になられておりましたので、村津君は同行させずに、道中課長と今井課長に病院に行ってもらいました。家族との話し合いで、村津君は帆足さんの担当から外し、帆足さんが元気になったら今まで通りショートステイに来ていただく、介護度が進んだら優先的に入所させる。病院代は施設で負担することで話がつきました。ドクターからは帆足さんは二日ほどで退院してよいとの返事をいただいています」
龍二は話しながら施設長の表情を窺っていた。少し柔らいだように思えた。
「大事にならなくて良かった。それで村津君はどうするつもりなんだ」
「その件ですが、本人を呼んで厳しく注意はしましたが、自分は精一杯やっていたので落ち度は無いとの反抗的な言い方でした。昨年十二月の異動を根に持っているようです。できれば解雇にもっていきたいのですが、無理矢理クビにすると労働監督署に訴えると言い張っています。少し時間をおいてもいいんじゃないかと

思っています」

施設長は、いつものように老眼鏡を布で拭いていた。いやな予感がした。苛立つ気分を落ち着かせているのだ。

「いつも事務長のやることは強引じゃないのかね。職員が何かを失敗すれば、本人の望まない部署に異動で飛ばし、自主退職にもっていこうとしてきた。体裁の良い解雇ではないのかね。そんなやり方だったら敵を作るだけで、誰も付いてこないのではないか。せっかく雇用して、時間をかけ仕事を覚えさせ、これから頑張ってもらおうとした職員を簡単にクビを切り、減らしていくだけだ」

龍二は施設長の言葉に、苛ついた。今まで組織を守るために、人がいやがる仕事をやってきたというのに、何という言い方をされるのかと怒りを感じたが、気持ちを抑えた。

「私は施設長が言われる、四つのジンザイのうち、宝のジンザイを増やし、だめなジンザイを減らすようにしているだけです。そうすることによって、職員全体の質が向上すると信じております」

龍二は、興奮していたのか、施設長の前ではっきり言い切ることができた。

少し間を置いてから、施設長は静かな口調で話し出した。

「……この施設長室に、職員が話を聞いてほしいと訪ねてくることがある。ほとんどは、仕事がおもしろくないという不満の話だ。自分が望まない仕事をやらされているという。『今の部署に居ては、自分の力が発揮できない』などと言う職員もいる。しかし、自分の望んでいない仕事の中で工夫できる職員は、どこの部署にいても力を発揮できるものだ。何かにつけて文句を言っている職員ほど駄目な者が多い。だいたい不満をいうこと自体、自分の努力不足を公言していることである。自分が就いた部署をチャンスと思えるかどうか、つまり発想を転換できるかどうかで、結果も違ってくるものだ」

聞いていて、背筋が寒くなった。施設長の言っている意味が、間接的に龍二に対して言っているように思えたからだ。

「はあ……」

龍二は、どう返事をしてよいのか迷った。

「私の言っている意味がわかるかね」

施設長の目は笑っていない。

「まったく言われるとおりです」

そう答えるしかなかった。

「事務長が施設運営に努力していることもわかっているが、職員を育てることも頼むよ。……今回の村津君の件は、事務長に任せよう。ただし報告は随時するように、わかったね」

施設長はそう言って、首を縦に振った。

「わかりました。いろいろ勉強になりました。これで失礼します」

一礼をして、龍二は施設長室から退室した。

事務所に戻ったが、施設長に言われた言葉が胸につかえ、すっきりしない。こんなときに、ナナミに逢えば……。

龍二は以前勤めていた職場の上司から、「男はセックスについて、好きか大好きかのどちらかなんだよ。嫌いな者なんかいないんだ」と、教えられたことがある。まさにその通りであると実感していた。

会員クラブでの限られた短い時間であるが、ナナミに逢うことによって気持ちが癒やされてきた。還暦を過ぎた男が元気で働けるのは、常に女性に興味を持ち、肉体関係を迫る気持ちを持つことによって、若いエネルギーを吸収していると龍二は信じている。

龍二は、ナナミという女性への私的感情を、職場に持ち込む自分自身の考えを分析してみた。

還暦を過ぎた男が娘より若い女を追いかけ、夢中になっているのである。自分の行動が、妻にばれたり、職場に知られた場合、家庭も職場も失う可能性がある。ましてや人事異動という名を借りて、人罪と思われる職員を、自主退職に追い込んできたのである。事務長を恨んでいる人間もいるだろうし、何らかの反抗を試みたいと思っている職員もいるはずである。

龍二が風俗店に通っていることを知れば、噂に尾鰭が付いて社

会的信用は落ちる。それが施設長の耳に入れば、万事休すである。
そんな危険まで冒して、ナナミに逢わなければならないのかとも思う。ただ安全な人生がおもしろいだろうか。そんな生き方なんて死ぬときに後悔をする気がする。『悔いなき人生』を送ることが龍二の本望である。それに彼女に逢えば逢うほど、人生にエネルギーが湧いてくる。だから人罪を切り捨て、施設長の叱責に耐えることができるのだ。
ナナミのことを考えても、こちらから逢いに行く手立てはない。このままでは、苛立ちを覚える。会員クラブに電話を入れたが、前回と同じで彼女のプライバシーは言わない。
「ナナミさんにそっくりな女の子が入ったんです。レナという名前で、同じ土曜日しか出勤しないんですが、どうですか」
店員から突然の誘いに迷った。ナナミに似ているという言葉が心の奥底に沈み込んだ。
「レナさんを土曜日の十時からの予約でお願いします」
龍二は軽い気持ちだった。ナナミへの気持ちを紛らわせたかった。

土曜日、妻には仕事だと言って家を出る。神戸へ向かう途中にバイアグラを服用し、携帯から会員クラブのホームページを覗いた。レナは十九歳でナナミより三歳若かった。
ビル内のエレベーターに乗り込み開閉ボタンを押す。三階で降り『ココナッツクラブ』と書かれた黒い大きなドアの前に立つ。インターホーンを押す瞬間が緊張感を増す。前回の来店は昨年の十一月下旬であるから、ドアの中に入るのは二ヶ月ぶりだ。
部屋に案内されると若い女の子が待っていた。「レナです。よろしくお願いします」と言った。あどけない顔をしていた。どことなしか顔の輪郭がナナミに似ている。少し気持ちがやわらいだ。レナは緊張しているようだ。龍二が要求することには、素直に応じた。

明るい電灯の下で、ピンク色の乳首、白い張りのある肌が映し出されている。彼女は羞恥心がないのではなく、新人だから仕事を忠実に全うしようとしているのではないか。それがいじらしい。事が済んでから少し話をした。

彼女は、歯科医院で助手をしており、お金を貯めて歯科衛生士の専門学校に行って資格を取りたい。歯科医院は日曜日が診察日で、休みである土曜日に会員クラブで、バイトをしていると言った。

「両親は知っているの？」

龍二の質問にレナは頭を横に振った。彼女の仕草を見たとたん、「何という冷酷な質問をしてしまったんだろう」という後悔の念が湧き上がってきた。場の雰囲気が沈んだ。

そっとレナを引き寄せ抱きしめた。彼女は無抵抗でされるままだった。ちょうど体形が小柄でナナミと同じである。性格も素直だし、レナに乗り換えても……。

レナの素直さに不安な気持ちが、頭をよぎった。風俗店に勤めて助平な男たちに、オモチャにされているのかと思うと胸騒ぎがする。

「いろんな男を相手にするのは大変だろう」

「怖そうなお兄さんが来て、気持ちが固まることもあるけど、じっと身を任せて時間が経つのを待つの」

「そうなんだ」

それ以上のことは言えないし聞けない。レナにはレナの人生があるのだから……。

それでも目の前にいる彼女を、娘と比較してしまう。娘が龍二に隠れて風俗店で働いていることを知ったら、平常心ではいられないだろう。

帰り際にレナから、名刺をもらってほしいとせがまれた。「ちょっと書くまで待ってね」と言われ、コメントの書かれた名刺を受け取り別れた。

店を出てから名刺を見た。『わざわざ会いに来てくれてありがとうございます。優しいおじさんに会えてうれしかった。また会いに来てくれるのを信じています』と書かれていた。

歯科衛生士の専門学校に行くお金を貯めるために、春を売っているいじらしい彼女の書いた名刺を、お守り代わりに肌身離さず持っていてやりたいが、どこで誰に見られるかわからない。社会的信用を失わないため、心を鬼にして名刺を細かく破り、道端のゴミ箱に捨てた。

今日、レナと遊び、そして話をしたことで、胸の中でもやもやしていたものが少しは晴れた。またレナに逢いに来て、多くの時間を彼女と過ごし元気づけたい。自分でお金を稼いで専門学校に行こうとしているのだ。親の脛をかじって、あたかもそれが当然のようにして大学に行っている若者より、はるかに優秀な社会人である。

今まであんなにナナミの姿を追い求めてきたのに、龍二の中にレナの影が広がると、不思議なもので、ナナミの影が薄れた。

毎週月曜日は出勤している職員の半分がロビーに集まり、朝礼が行われる。最初に施設長の訓示があり、その後一週間の行事予定が読み上げられ、各部署との連絡調整と意思統一が図られた。最後に事務長の一言を進行役である相談員から求められる。

この一言を喋ることに神経を使う。週一回の朝礼で貴重な時間を与えられているのである。隣には苦虫を噛んだ顔で施設長が聞いている。「なるほど、さすが事務長」と思わせる内容の一言を話さなければならない。

龍二は、一歩前に歩み出て、職員の顔を見渡してから喋る。

「先週にあったことですが、デイサービスに来ていただいている利用者様が、送迎中に担当職員の不手際で尻餅をつかれ尾てい骨にひびが入り、入院されるという事故があり、家族から職員に対する苦情の電話が入りました。非常に由々しき出来事です。すぐ

に担当職員の上司である今井課長と総務課長が、病院へ謝罪に出向き、何とか穏便に済ませることができました。利用者様が事故に遭うということは、一つ間違えれば、施設の存亡に関わることです。職員一人一人が、施設を背負っているんだという自覚を持って、職務に励んでいただきたい。以上です」

龍二は、言い終わった後、横目で施設長の顔を盗み見た。口元を強く閉じ、小さく何回もうなずいている施設長の姿を見て、胸をなで下ろした。

事務長の一言が終わると朝礼は解散となる。龍二は事務所の方に向かいかけると、相談員の伊藤が近づいてきた。

どきりとした。怒鳴ってから伊藤と話をしていない。龍二を避けていると思えたからだ。

「今朝早く北条菊野さんのお孫さんから、今日の午後に入所申込書を持っていきたいと連絡が入りました。本人との面談と症状の確認をしたいので、菊野さんも一緒に来てほしいと伝えています。面談には介護課のリーダーと医務課の看護師にも同席をお願いし了解を得ました。先日お孫さんが来られたとき、事務長が気にされていたようなので、一応報告しておきます」

おどおどした言い方だった。少し後ろめたさを感じたが、胸ポケットに差し込んでいる手帳を取り出した。慣れた手つきで日々の予定が書かれた二月のページを開けた。

「何時に来られるのかな」

すかさず問い返していた。

「午後の二時です」

予定表には午後一時三十分から経営会議が入っていた。施設長を含めた課長以上の職員が参集し、各部門の毎月の入所者状況や収入額と支出額の収支状況の報告。それに備品購入や設備更新箇所の確認と経営状況を分析する。無駄を省き経営状態を向上させる会議で、毎月一回開催されていた。重要な会議であり、事務長が中心となって進めなければならない。抜けるわけにはいかなか

った。

「うーん……」

唸ってしまい声が出ない。脳味噌を回転させて、会議を抜けナナミらしき女性に会える方法はないかと考えてみたが、混乱を増長させるだけだった。

「経営会議のある時間と、ダブってしまいましたね」

伊藤は龍二の手帳を覗き込んで言った。

入所申込者の孫であるナナミらしき女性が来たときに、スマホで彼女の姿をわからないように、撮ってほしかったが、事務長という立場であることを考えると頼めない。他の職員に漏らされでもしたら信用を失う。

それに先日、伊藤に対して厳しい言葉を投げつけたことが、距離を感じさせた。彼は龍二に反感を持っているはずである。

「北条菊野さんの、家族の連絡先を聞いておくように」

龍二は心の奥に秘められた感情を押し隠した。経営会議がなければ、本人か確認できるのに残念でならない。

龍二は自席で書類に目を通し、決済印を押していった。頭の片隅にナナミの顔がちらつき、内容がスムーズに入らない。彼女と再会することが諦めきれない。何か良い案を思い出せるのではないかと、自分の能力を信じたが、時間だけが刻々と過ぎるだけだった。

三階の会議室に、課長以上の職員八名が参集した。コの字に机が並べられた中央に施設長が睨みをきかせている。その横に事務長である龍二が座った。

「それでは、経営会議を始めます。施設長から一言お願いします」

龍二は進行役として会議を仕切った。

「各部署において皆さんに頑張っていただいていますが、堅実かつ積極的に事業を進めていただきたい。事業推進に必要な、生きたお金なら惜しみませんので、申し出てください」

施設長の挨拶が終わると、各部署の利用状況と、先月までの経

理状況が報告された。

「以上報告状況からして、堅実に事業が進められており、来月以降もよろしくお願いします。それと、利用者及びその家族とトラブルを起こさないよう、くれぐれも慎重な対応をお願いします。これで経営会議を終わってよろしいか」

龍二は言い終わると、腕時計に視線を落とした。三時前だった。急げば北条菊野の孫であるナナミらしき女性に、出会えるかも知れないと思った。

「施設長に伺いたいんですが、職員の中に私的な感情で、部下を叱責しているのをご存じですか」

突然発言をしたのは、相談課長の北田だった。龍二は伊藤相談員への発言のことを言っているのだと思うと、急に胸が熱くなってきた。

「今の発言内容は、経営会議の中ではそぐわないので、別途関係者だけで話し合いをしてはいかがでしょうか」

龍二は会議を終了しようとした。こんな場でナナミらしき女性の話を出され、私的な感情で伊藤相談員を怒鳴ったとなると、皆の前で施設長から叱責されかねない。

「北田君。どういうことなんだ。もっと具体的に話さなければ、わからないではないか」

施設長が口を挟んだ。

「施設長、この件はこの会議の場よりも、このあと施設長室で北田課長と一緒に説明をさせていただきます。ご了解願います。北田課長もいいね」

龍二は北田課長の顔を睨み付け、視線を外さなかった。北田も了解したのか、軽くうなずいた。

「経営会議は終了します」

終了発言を待って、各課長の顔から龍二に対する疑心暗鬼の表情が窺われた。

龍二は施設長の後に続いて、二階の施設長室に向かった。後ろ

から付いてくる北田がどこまで知っているのか諮りかねた。伊藤が龍二から怒鳴られたことだけなのか。北条菊野のキーパーソンである孫の、どこまで知っているというのか。

施設長室で、北田課長は施設長から発言の真意を聞かれた。

「伊藤君が落ち込んだ様子だったので声をかけると、『面談した北条菊野さんの入所の件で、家族の連絡先を聞いていないと、事務長から怒鳴られた』と言いました。事務長の頭ごなしの言い方に腹がたち、経営会議の席で発言させてもらいました」

伊藤とのやり取りだけの内容に、龍二は重圧から解放された。ここは上司である北田の顔を立てて、低姿勢で接すれば、話がうまく収まる気がした。

「あのときは、経理の面で忙しいときで、少し感情的に喋ってしまったようだ。そのことは気になっていて、伊藤君とはじっくり話さなければと思っていた矢先に、村津君が帆足さんの尾てい骨にひびが入る事故を起こした。その片付けに気が向いてしまって、彼のフォローができなくて反省をしている」

龍二は頭を下げた。

「そこまで言っていただけるのなら、この件はこれで終わりにしましょう。伊藤君にも事務長が謝っていたと言っておきます」

北田は満足の表情だった。

「事務長は、喋り方に注意をするように。この件はおしまいだ」

施設長がそう言ったので、この件は無事終えることができた。その後、今年度の事業収益の話などをして、施設長室を退席した。

龍二が事務所に戻ったときは、四時になっていた。ロビーの相談室はひっそりとしている。北条菊野の家族が帰ってしまっているのは間違いない。

机上の内線電話が鳴り、受話器を取った。

「事務長ですか。伊藤です。さっき北田課長から聞きました。いろいろご迷惑をかけ申し訳ありませんでした」

謝ってきたところをみると、伊藤の小心さが窺えた。怒鳴られ

て落ち込んでいたと、北田が言ったが本当だろう。この電話で北条菊野の家族との面談結果を聞きたかったが、先ほどの施設長室で北田とのやり取りを考えると、時間を置いた方がいいと思われた。

「気にしなくていいんだ。こちらも言い方が過ぎたようだ。悪かったね。これからもよろしく頼むよ」

ここは伊藤に腰を低く接しておくことが、無難である。

「こちらもよろしくお願いします。……事務長。今日面談した北条菊野さんの件を報告しておきます。来られたのは、本人とお孫さんで、お孫さんの名前は北条美咲さんと言われます。住所は……」

「ちょっと待ってくれないか……。忙しいだろうが、今すぐに相談室に来れないか」

面談内容は、直に聞きたかった。

「わかりました。すぐに行きます」

龍二は受話器を置くと、掌に脂汗が滲んでいた。北条美咲がナナミではないのかと考えると、鼓動が速くなる。大きく深呼吸を一つしてから、席を立ち相談室に向かった。

龍二はロビーに設置された相談室で、伊藤と向き合った。

「忙しいのに、呼びつけたりして申し訳ないね。前回は少し感情的になって気分を悪くさせて、すまなかった」

龍二は伊藤と向かい合って、すぐに北条美咲という女性のことを問いただしたかったが、ここは前回の失敗を繰り返さないために、ぐっと押さえた。まずは伊藤との気まずい感情を解きほぐすためにも、詫びる言葉から入った。

「北条菊野さんとお孫さんが来られ、入所申込書が提出されました。ご覧になりますか」

伊藤はそう言って、テーブルの上に入所申込書類を広げた。龍二は目の前に置かれた書類を手にした。北条菊野のキーパーソンに北条美咲の名前が書かれていた。続柄は孫。年齢は二十二歳、

住所は神戸市北区となっている。その下に自宅の電話番号と、美咲の携帯番号が二段書きになっていた。孫である彼女が、ナナミかどうかの確認ができれば最高なのだが……。美咲の住所と携帯番号を脳裏にたたき込んだ。そして視線を書類から伊藤に向けた。

「入所申込書類を見る限り北条菊野さんの介護度は三で、移動には車椅子を利用されている。認知症状はないみたいだ。一緒に面談した介護課と医務課の了解が得られたら、家族の方も本人の介護に困っておられるので、今月の入所検討委員会に諮り、空きが出た段階で入所できるように、手配をしてあげたらどうかね」

龍二は事務長としての立場から、伊藤に対して客観的な言い回しで、配慮する指示をだした。入所申込書を受け付けた場合、本来なら来月の入所検討委員会に諮るのが原則だが、ナナミらしい女性を意識したのだ。

「入所申込みの待機者が、まだ四、五十名はおられますが、それを飛び越えて入所させるということですか」

伊藤は驚きの表情をした。

「結果的には、そういうことになる。伊藤君も知っているだろうが、入所については申込み順ではなく、緊急性の高い方から入所させることになっている。だから入所者の介護度、認知度、家族の介護困窮度合いなどを考慮して決めることになる。現実はそれらに加えて、施設で世話のかかる入所者かどうかも含めて、総合的に判断して入所させているんだ。私の言っている意味がわかるだろう」

龍二は伊藤に視線を向けたまま、ゆっくりした口調で言った。

「はあ……、事務長がそう言われるなら、そのようにしますが……」

伊藤は、まだ納得しかねていた。

「君の言いたいことは、表情を見ていたらわかるよ。しかしねえ……、手のかからない入所者の比率を高くすることは、介護職員の負担を軽くし、介護職員数も少なくて済むことに繋がる。強いては施設運営の収益が上がることになる。事務長としては、経営

のことも考えなくてはならないんだ。わかってくれるだろう」
龍二は低姿勢をとおした。
「わかりました。今月の入所検討委員会に諮るように手続きを進めます。それと……」
伊藤は言いにくそうな仕草をした。
「どうしたんだ。他に何か気になることでもあったのか」
立ち上がろうとした龍二は、伊藤の意味ありげな言い方が気になって、椅子に座り直した。
「北条菊野さんが帰り際に、『この施設に村津という職員がいると思います。ちょっと呼んでもらえませんか』と言われ、ロビーで立ち話でしたが、村津さんと会われました。『お知り合いですか』と聞いたら、菊野さんは村津さんのことを長女の息子だと言っていました。つまり孫で、美咲さんは長男の娘で村津さんと美咲さんは従兄になるそうです。長女は一番上で若いときに家を飛び出したらしく、あまり菊野さんの家には寄りつかなかったのですが、最近に会ったらしく、そのときに村津さんの職場を聞いていたらしいです」
伊藤は菊野から聞いたことを一気に喋った。龍二は顔面から血の気が引くのを感じた。もし美咲がナナミなら、村津に彼女との関係を知られる恐れがある。
「北条菊野さんのお孫さんは、どのような人だった。いやちょっと、入所となると、キーパーソンになる人が、どんな方かを知っておきたいと思って……」
龍二は美咲に関する質問が、言い訳じみてにやりとした。
「小柄な方で、綺麗な方でした。こちらの質問には、はきはきと答えられ、施設への要求内容もなく、キーパーソンとしては問題ないと思います」
伊藤の美咲への印象は、世の中に沢山いる一般的な言い方で、ナナミとの関係をにおわすヒントとなるものはなかった。
「特徴を聞きたかったんだが……。入所の件は頼んだからね」

龍二はそう言って席を立った。

「そうそう、にっこり微笑むと両方の頬にえくぼができて、喋っているときは、口元から八重歯が覗いていました」

伊藤は、思い出したのか、ぽつりと言った。

龍二の足が止まった。まさにナナミの特徴である。「もっと早く言えよ」と思ったが、平静を装い「ありがとう」という言葉を残して、相談室を出ようとした。

「そのあと村津さんに出会って、美咲さんとの関係を確認したんですが、従兄で間違いありませんでした。そのとき、事務長の話が出て、村津さんと僕は事務長に叱責された共通点があって、話が盛り上がり、『事務長は、美咲さんの連絡先などを、すごく気にされているんです』と言ってしまったんです。そしたら村津さんが『美咲さんと事務長が何らかの関係があるのではないか』と言われるんですよ。どうしてですかと聞いたら、村津さんは言うのを躊躇っていたんですが、『美咲さんが風俗店に勤めていたことがあるらしく、その関係ではないか』と……。僕は『まさかそんなことが』と言って否定をしたんですが。……事務長は何か心当たりはありますか」

伊藤の言葉は、龍二を身動きできなくした。鼓動が速くなり、顔面を紅潮させた。

「馬鹿なことを言うんじゃないよ」

それだけ口にするのが精一杯だった。龍二は動揺した表情を伊藤に見せないために、振り向かず、そのまま相談室を出た。

事務所に戻った龍二は、椅子を半回転させて、外の風景に視線を向けた。先ほど伊藤が言った村津との会話が、胸一杯に充満していた。美咲と村津が従兄であることに驚かされたが、それ以上に彼女が風俗店にいたのを、村津が知っていることに衝撃を受けた。美咲との繋がりを勘繰り始めているのだ。

今日は三月一日、北条菊野の入所日である。事務所の窓から見

える桜のつぼみが少し膨らみかけ、もうすぐ花が咲きそうである。
始業時間から龍二は落ち着かなかった。入所には当然キーパーソンの美咲が菊野と一緒に午前十時に来ることになっていた。これまでの入所に関するやり取りの中で、彼女の職業が病院に勤め医療事務を行っていることを確認している。美咲に逢わない選択もあるのだが、菊野が入所すれば、早いか遅いかで彼女と顔を合わせることになる。
十時きっかりに、玄関の自動ドアが開き、車椅子に乗った菊野が美咲に押されて入ってきた。玄関横の受付窓口から顔を覗かせた。
「北条菊野です。本日入所で来ました」
龍二は事務所から玄関辺りを窺っていた。紺のパンツスーツ姿の女性は、紛れもなくナナミである。あのパッチリした目が印象的だ。
「すぐに相談員を呼びますので、スリッパに履き替えて、ロビーでお待ちください」
女子職員が対応していた。内線電話で伊藤相談員を呼び出している。龍二は美咲の前に出るタイミングを計っていた。どう声をかけるべきか迷った。目の前に急に飛び出せば、彼女は驚きの表情を見せ、困惑するだろう。
龍二が、祖母を入所させる施設の事務長をしているなんて、夢にも思っていないはずである。ロビーから見える事務所の入口付近で龍二の姿を見せれば、彼女が困惑し動揺したとしても、落ち着く時間を与えることができる。
龍二は席を立ち事務所を出ようとしたとき、ロビーには、すでに村津が立ち、菊野と美咲を待ち受けていた。
美咲は村津と挨拶らしき言葉を交わしている。そんな中に伊藤が合流した。彼女は事務所の方を一回も見ることもなく、伊藤に案内され、菊野の車椅子を押して、入所する特養棟の部屋に歩いて行った。その後を村津も続いた。龍二が考えていたシナリオは、

完全に空振りをしてしまった。

龍二は自席に戻るしかなかった。机上には、各部署から持ち込まれた介護日誌が十数冊積み上げられていた。日勤、夜勤に分けて利用者の状況、出来事を毎朝報告してくる。目を通していると、一時間はかかる。介護日誌を見ることによって、利用者の健康状態や行動、また職員の勤務状況など、施設内のことを把握することができた。

介護日誌を手に取り読もうとしたが、そんな気分にならない。それでも午前中に押印をして各部署に、返してやらなければならない。それが事務長の仕事なのだ。龍二は介護日誌の昨日の日付欄を開く。読んだところで一向に内容が頭に入らない。

龍二は押印の途中に、事務所の入口に足を運びロビーを覗いたが、ひっそりとしていた。たまに職員が通るか、面会に来た家族が行き来するくらいだ。

十一時を過ぎた頃、特養棟から出てくる伊藤と美咲の姿を見つけた。龍二は一瞬気後れ状態になったが、このチャンスを逃せば、彼女と逢う機会は遠のくのだ。今の中途半端な気持ちから抜け出すためには、ここは引き下がれない。

龍二は事務所を出て、ロビーの中央に進み出た。顔の皮膚が硬直して笑みを浮かべることができない。それでも強引に表情を緩めた。美咲が徐々に近づいてくる。声をかけている伊藤に気を取られているのか、数メーター前にいる龍二の存在に気がついていない。それだけ緊張感が増して気持ちが硬直する。

ふと美咲が視線が上げた。彼女は途端に足の動きを止め、目の玉を大きく見開きし、開いた口を手で押さえた。美咲と視線が合った。

龍二は作り笑いをしたが、うまく笑えない。声をかけるべきだと思うのだが、のどの奥を締め付けられているようで、声が出ない。何とかうなずく表情を作ることができた。

そのとき伊藤は龍二の姿に気がついたらしく、手を広げ龍二を

指すようにして、
「まだ紹介していませんでしたね。事務長の松崎です」
伊藤は、そう言って紹介した。美咲は龍二に向かって軽く頭を下げたが、表情には、心の動揺が映し出されていた。
「いや……どうも……、今日は、北条菊野様の入所日でしたね。おばあさまは部屋に入られて何か言われていましたか。……今入所したところだから、わからないか」
お互い困惑気味が漂う雰囲気を断ち切るために、龍二は彼女に話しかけたが、口元が重く感じられ普段通りには話せない。伊藤がいなければ私的な話ができるのだが、そうもいかない。
「伊藤君、連絡事項は済んだのかな」
龍二は、気まずい思いから逃れるために、話を彼に振った。
「はい。入所についての手続きは終わりましたので、業務に戻ります。……北条様、何か気になることがありましたら、電話でもいただければお答えします。菊野様との面会は、いつでもお越しください。その折は、事務所の受付窓口で、面会票の記入をお願いします。これで失礼します」
そう言って伊藤は職場に戻っていった。彼は、村津が言っていた二人の関係を疑っているはずである。悟られたとしても、これ以上の演技はできない。
気を使って立ち去った伊藤に、借りを作ってしまったと龍二は思った。小心者の彼のことだ。事務長に恩を売ることによって、職場での優位な計らいを期待しているのだろう。この場で感じた二人の雰囲気を、上司である北田課長に、ちくることはないだろうが、村津に喋る可能性は考えられる。これは事務長として職務を果たしてきた龍二の直感である。
「少し話をしませんか」
龍二は相談室に美咲を案内した。
「久しぶりです。こんなところで出会うなんて奇遇ですね」
二人きりになると龍二は、余裕をもって声をかけることができた。

「驚きましたわ。あの仲良しさんが、事務長さんだったなんて……。お店のことは内緒でお願いします」

美咲は唇を噛みしめて、頭を下げた。

「わかっています。その話は、この場限りにしましょう。それでもあなたに逢えて良かった」

龍二は何回もうなずいて見せた。彼女のパンツスーツから身体の線が窺えると、艶めかしさを感じ、店での出来事を思い出してしまった。

「祖母のこと、よろしくお願いします」

美咲の言葉で我にかえった。菊野の身元引受人になっている彼女は、店で逢っていたときよりも年上に見えた。

「心配いりません。気配りはしておきます。……それより経済的に問題ありませんか」

聞きにくかったが、やはり気になる。祖母の施設入所には毎月七万円程度はかかる。

「はあ？」

「お店に勤められたのは、経済的な理由ではないのですか」

龍二は、彼女の小さな胸の中へ強引に割り込み、プライベートなことを聞き出そうとしている自分が心苦しかった。しかし、何か役に立ちたいとする気持ちが強く、抑えられない。

「お店のことを言われると恥ずかしいです。心配いりませんから……」

美咲は顔を赤くして、視線を落とした。

「そうですか。失礼なことを聞いて申し訳ありません」

彼女の気分を悪くしてしまったのではないかと、気が重くなった。

「気遣いは結構ですので……、いろいろありがとうございます」

彼女の顔には笑みが含まれていた。その表情を見て龍二は救われた気持ちになり、会話を続けられた。

「ちょっと耳に挟んだのですが、ここで働いている村津君とは従

兄になるのですか」

龍二の質問に、美咲はほとんど表情を変えなかった。

「そうなんです。歳も離れていますし、それに祖母の家にもあまり立ち寄らなかったので、私もほとんど話をしたことがないんです。私の父の姉の子どもということです」

「そうなんですか」

とりあえず返事をした。龍二にしてみれば、美咲が村津の縁戚になることが納得できなかった。拒否をしたところで現実を変えることはできない。

「昼から職場に戻りたいので……よろしいでしょうか」

美咲の言葉に龍二はうなずいた。逢うまでは期待が膨らんで、店を辞めて出会えなくなった原因を、問いただしたいと思っていたが、彼女を目の前にすると、これ以上プライベートの話は聞けない。

「時間を取らせ、いろいろ気に障ることを聞いて申し訳ありませんでした。これでお店の話は打ち止めにしますから……」

これでナナミとお別れだと思うと、最大限の感謝の気持ちを伝えたかった。彼女はにこっと微笑み、軽く頭を下げた。

龍二は席を立ち、帰る美咲を見送った。彼女と深い関係に戻れるのではないかとの、淡い期待は完全に立ち消えた。もはや風俗店で働くナナミではないのだ。これから美咲のことは、入所者の家族であると割り切らなければならない……。

事務所に戻って机の引き出しから、北条菊野の面談記録のコピーを取り出し読み返した。美咲の両親は死亡していた。菊野という祖母を抱え病院で働きながら、不足する生活費を風俗店で稼がなければならないとしたら……。考えただけでも胸が締め付けられる。同情する気はないが、協力はしてあげたい。

ゆっくりコーヒーを飲んだ。味は感じないが気持は落ち着く。一つの流れが終わった感じだ。過去に引きずられることなく、新しい流れに乗る気持ちに、切り替えていかなければ……。龍二は机上の読み終わっていない

介護日誌に目を通した。

村津の存在が大きくなり、龍二を苛つかせた。『美咲と事務長が関係あるのではないか』という言葉が躍る。彼女との関係は、龍二が風俗店に行ったことを意味する。職場内に知れ渡れば職員たちから失笑を買う。何としても村津の口を封じなければ……。冷静に考えれば、彼の推測に過ぎない気もする。

村津が起こした事故の件も、中途半端なままになっている。施設長には何らかの形で、報告をしなければならない。

「道中課長、村津君を三階の会議室に呼んでくれないか。いつものことだが、課長にも同席をたのむよ」

職員同士であっても、個人情報が絡む内容である場合は、当事者だけでなく、他の職員を同席させている。話がこじれた場合に言った言わないが、問題となるからである。

会議室で龍二の横には道中が座り、村津とは向き合う形を取った。今までこの形で何回か話し合いをもったが、今回は龍二の中で雰囲気が違う。

「村津君は北条菊野さんのお孫さんになるらしいね」

龍二は探りを入れた。

「北条菊野は、母の母親にあたります。どうしてそんなことを聞かれますか」

逆に質問されたことで緊張感を覚える。村津はデイサービスに異動させた恨みを龍二に持っている。

「北条さんが祖母に当たるのなら、君がキーパーソンである身元引受人になれば、施設側としても、連絡や対応がしやすいと思ってね」

「母は若いときに、実家である祖母の家を飛び出して、ほとんど寄りついてないんです。ですから祖母の面倒は、母の弟に当たる叔父が見てきました。僕は戸籍上の孫であって、ほとんど付き合いはありません」

「だから叔父さんの子である北条美咲さんが、キーパーソンである身元引受人になっているということか」
「その判断は美咲さんがされたんでしょう。僕はほとんど祖母に会っていませんし、母の実家にも行っていません。それでも母は叔父が亡くなったと聞いて、祖母のことが心配で実家に寄ったみたいで、そのときに僕の職場を教えたのだと思います」
今までの挑戦的な態度を考えると、村津の返答が素直であったことに、何かが違っている気がする。
「そういうことか」
龍二は納得する表情を見せた。村津の言葉から推測すると、菊野と村津の母親による親子の会話から、互いの情報が交わされたことになる。
「ここに呼ばれたのは、祖母の件ですか」
「それもあるが、本題は先日事故があった帆足さんの件だが……、家族から苦情が入っている。このまま済ますわけにはいかない。わかるだろう」
龍二は言いにくそうな態度を見せた。
「処分ですか。そちらの好きなようにしてください。事務長を信じていますから」
あまりにも、あっさりした村津の言い方に、拍子抜けをした。
「信じているとは、どういう意味だ」
「言葉どおりです」
村津のにやけた表情が不気味だ。
「どうした。いつものように、反論してこないのか」
胸のうちが読めない。少し突っ込みを入れた。
「伊藤相談員から聞きました。事務長が祖母の入所の件で、『家族が困っておられるので、急いで入所検討委員会に諮り、ベッドが空きしだい入所させるように』と、指示があったと……、祖母の件ではいろいろ配慮いただきありがとうございました」
村津は龍二の前で頭を下げた。先ほどから低姿勢で返答してく

る態度に違和感を覚える。村津の態度に余裕が読み取れた。龍二と美咲の関係を知っての余裕なのか。緊張感が増す。隣では何も知らない道中がうなずいている。

「もう、デイサービスの仕事は慣れたかね」

龍二は質問を変えた。

「何とか慣れてきましたが……」

村津は最後の言葉を言いにくそうに濁した。

「どうした。最後が聞こえなかったが」

「はあ……」

「介護課に居たときよりも、収入が減って困っているということが、言いたいのではないのかね」

ずばりと言った。村津がデイサービスに異動させられて、夜勤手当がなくなり腐っていることは承知していた。

「それもありますが、……できることなら、祖母の側にいて介護をしてあげたいのですが……」

村津は龍二の目を見て、懇願する表情をした。彼の表情から、祖母を思う孫の気持ちを感じたが、演技とも思える。

「介護課に戻りたいということかね」

村津は、「はあ……」と頭を縦に動かした。

殊勝な顔をして、かしこまっている態度が、どうも合点がいかない。あまりにも素直な態度を見せすぎだ。信じられない。

「道中課長、済まないが事務所へ行って、介護休暇が取れるかどうか確認してくれないか。それと介護休業制度についても調べてきてほしい」

突然の呼びかけに、道中は驚いた顔をしたが、すぐに会議室を出て行った。龍二は村津が良からぬ魂胆を秘めていると睨んだ。だから道中に席を立たせたのだ。

「どういうことなんだ。何を考えているんだ。殊勝な態度を見せているが、騙されないぞ。はっきり言ってみろ！」

龍二は村津を睨み付けた。

「事務長と美咲の関係は知っているんです。僕が喋れば、理事長の耳に入って、事務長はこの施設に居られなくなる。だから僕を怒らせない方がいいと思いますよ」

にやけた顔で言い返してくる。龍二は頭に血が上り、村津を怒鳴り散らしてやりたかったが、『短気は、損気』のことわざが浮かぶ。美咲との関係をどこまで知っているというのだ……。聞く勇気が湧いてこない。

「……」

反論する言葉が見当たらない。

「事務長は、僕が確証もなく言っていると疑っているでしょう。祖母の家に母が寄ったとき、美咲が風俗店へ勤めていることに気づいた祖母が、心配して相談してきたんです。それを僕が母から聞き出したんですよ。そこへ伊藤相談員が、『事務長は美咲のことを気にしていた』と、言っていましたから、ピンときたわけです」

「……」

龍二の推測したとおりだ。

「反論するなら、言ってくださいよ。美咲は従妹ですが、ほとんど付き合いもありませんから、巻き込んでも痛いことも、痒いこともありません」

「馬鹿も休み休み言え！」

龍二は熱くなり、顔が赤くなっているのが自分でもわかる。

「それだけ顔面を紅潮させるところを見たら、ドンピシャですね」

なおも迫ってくる。

「何が言いたいのだ！」

強がりを言ったところで、立場は逆転してしまっているのだ。

「家庭を守るために、少しでも多くの生活費が必要なんです。だから給料を増やしたいし、不当な処分は受けたくないんです」

にやけた表情が消えていた。村津が一歩引いたと感じた。

「条件を聞こうじゃないか」

村津の真剣な眼差しを見て、聞いてみる価値はある。
「従妹が絡んでいるので、荒立てる気はありません。介護課に戻りたいのと、事故の処分を軽くすること。それと職場での僕の立場を配慮すること。それだけです」
「……」
事務長の職務権限で可能な範囲である。それでも即答する気にはなれない。条件は妥協しても気持ちは負けたくない。
そのとき、道中が会議室に入ってきた。
「どうだった」
何もなかった顔をして、龍二は道中に問いかけた。
「介護休暇は、年に五日取れますが、賃金は無給となります。それから介護休業ですが、これも無給ですが、年に九十三日取得可能です。申請すれば雇用保険から介護休業給付金が支給されます」
「村津君、聞いての通りだ。介護休暇は取れるが、賃金カットとなるということだ」
「そうですか」
村津も話の調子を合わせてきた。
「介護課に戻りたい件だが……、来月の四月は定期異動の時期だ。介護課に戻れるように考えてみよう」
龍二は村津の顔に、視線を合わせて言った。道中には先ほどの村津とのやり取りを悟られたくなかった。
「本当ですか」
村津は表情を崩した。
「今から、そんな安請け合いをしてもいいんですか」
隣に座っている道中が、心配したのか口を挟んできた。
「考えると言っているだけだ」
そう言って、道中の言葉を押さえた。龍二は黙って聞いている村津に話しかけた。
「ただし、異動には職員を出す側のデイサービスの今井課長と、受け入れ側の介護課の井上課長の了解が必要なんだ。だから村津

君が介護課に行きたいと希望を出しても、井上課長が要らない言えば、それまでなんだ。わかるだろう。最後は施設長の了承も必要だし、いろいろ手続きを踏まなければならない。この件は事務長預かりとさせてもらう。……それと先ほど話した帆足さんの件だが、処分が何も無しというわけにはいかない。厳重注意ということにする。これからも施設のために頑張って働いてほしい」

龍二は勿体を付ける言い方をした。横に座っている総務課長である道中の手前もある。じっくり事を運ばなければ失敗することも考えられる。美咲との噂が施設内に流れ、施設長の耳に入ればすべてが終わってしまう。

「よろしくお願いします」

役者になった方が合うのではないかと思わせるほど、村津はテーブルに手を着いて深々と頭を下げた。龍二は彼の要求が無茶なことではなかったことに安堵した。

家庭を守るための要求と考えれば、理屈は通っている。強迫されたことは屈辱であるが、ここは辛抱するしかない。今まで事務長として職員に行ってきた行為の、報いと受け取るしかあるまい。

事務所に戻った龍二は、あと半月余りに迫った定期異動で村津の介護課への復帰、それに帆足さんに関する村津の処分について、施設長にどう報告すべきか思案をしていた。先ほど会議室で見せた村津の態度を思い出して飲むコーヒーは、格別苦かった。

龍二はゆっくり階段を上り、施設長室に向かった。エレベーターを使わない。今の車社会を考えると歩く機会が減っている。足腰の衰えを少なくするために、身体を動かすことに努めていた。

施設長室のドアの前に立つと、村津とのやり取りが浮かび、今まで以上に緊張する。報告内容は簡潔明瞭に説明し、無駄なことは言わない。施設長の発言に同調し、機嫌を損ねないようにして、了解を得なければならない。うまくいくのかと不安が先行する。

施設長は精神科医であり、運営法人の理事長として、常に組織のトップとして指示をし、人を動かしてきた。今まで周囲から強

く反論された経験がなく、自分の意見が正しいと信じ切っている。意見に賛同する職員が忠実な部下であり、施設に必要な人財である。指示に従わない職員は、施設に必要のない人罪なのだ。

唯一反論に近い意見を述べることができるのは、事務長だけである。それには明確な根拠理由と合理的な説明が要求される。事務長としての地位を維持するためには、施設内での出来事は逐一報告し、常に人財であり続けなければならない。当然のことだが経理面では黒字が絶対である。

ドアをノックし、中からの返事を確認し、ドアを開け室内に入る。確認なしにドアを開けると機嫌が悪くなる。

「失礼します」

部屋の中央に置かれているソファーの横に立つ。

「座ってください」

施設長の指示を待って座った。このやり取りは、龍二がこの施設に就職してから、いつものことである。施設長に強制をされているわけではないが、事務長として無難に業務を成し遂げていくためには、施設長の前では常に謙虚でなければと、自分自身に言い聞かせてきた。

「本日は村津君の件で報告に参りました」

施設長の表情を窺ったが、機嫌が悪そうでもなかった。

「それで、どうなりましたか」

目の玉を、ぎょろっと動かして、龍二を睨む仕草に迫力を感じる。

「村津君は、帆足さんの件については深く反省し、最近は利用者に対して丁寧に対応をしております。今の態度を考慮して、厳重注意という処分でいいのではないかと考えております」

龍二は見返す視線に力を入れた。ここはどうしても施設長に納得してもらわなければ……。村津の条件を呑んだ以上、遂行しなければ今後の展開が見通せない。ここは正念場である。

「そんなに軽くていいのかね。利用者を不注意で、骨にひびをい

かさせているんだよ。そんな処分で他の職員への示しがつくのかね」

「何も厳しいだけが処分ではありません。ここは大目に見て、村津君にやる気を起こさせるのも管理職の努めです。それに皆が注目しています。寛大な処分によって、職員たちのモチベーションも高まると思われます」

施設長は考え込む態度を見せた。もう一押しである。

「なるほど、事務長が責任を持って村津君を指導していくと、解釈していいんだね」

施設長の表情に不機嫌の陰を読み取ることができた。

「そういうことになります。寛大な処分によって、村津君が頑張っている姿を職員たちが見れば、職場全体の仕事に対する意識が向上します。私に任せてください」

丁寧に言葉を返し、頭を下げた。

「そんなにうまくいくかね……わかった。事務長に任せよう」

龍二はほっとした気持ちになった。次に人事異動の話に持っていきたいが、施設長の顔から、先ほどの不機嫌な表情は完全に消えていない。どう切り出すべきか……。

「事務長は、安倍総理と自民党総裁選を争った石破茂が出している『政策至上主義』という本を、読んだことがあるかね」

施設長から声をかけてきた。

「まだ読んだことはありません」

書籍は施設長の得意分野である。

「石破茂は『政治家の仕事は、勇気と真心を持って真実を語ることだ』と言っている。施設の運営だって同じだよ。利用者に対して真心を持って丁寧に対応することだ。そうすれば利用者や家族から信用が広がり、おのずと施設への入所希望者と就職応募者が増え、施設経営が繁栄するというものだ。事務長は私の言っている意味がわかるかね」

「まったく施設長の、言われるとおりです」

そう返事をすると、施設長はたちあがり、部屋の隅に置かれている本棚から、『政策至上主義』の本を取り出してテーブルの上に置いた。

「これを読みなさい。この本には福祉施設の経営に役立つ哲学が書かれている。きっと参考になるから」

「ありがとうございます。読ませていただきます」

そう言ったが、施設長のように、勤務中に読むわけにはいかない。家で睡眠時間を減らすことになるが、勤めている以上やむを得ない。

「もう報告が済んだのなら、職務に戻っていいよ」

施設長は言ったが、まだ退席できない。村津が出した条件が残っていた。四月異動の件を話さなければならない。彼の話を出せば、不機嫌がぶり返し、反対される可能性を感じる。どうすべきか龍二は迷った。

「施設長。もう一冊。福祉の哲学になる本があれば、ご紹介願えませんか。もっと勉強したいのです」

龍二は笑みを浮かべ頼み込んだ。

「ほう、事務長が福祉の哲学を勉強したいとは、珍しいではないか」

「私も勉強して少しでも施設長に近づきたいと思っております」

施設長は、龍二の言葉を聞いて、強ばっていた表情を崩した。

「事務長が福祉の哲学を勉強したいと思うなら、エリザベス・キューブラー・ロスの『人生は廻る輪のように』という本を勧めよう。精神科医でもある彼女の自伝で、是非読みなさい勉強になる」

施設長は、自慢するように言った。

「ありがとうございます。すぐに買って読みます。読み終わったら感想意見を報告させていただきます」

「あ、はっは……楽しみにしているよ」

施設長の機嫌は良かった。

「これで失礼します」

龍二はそう言って、席を立ちかけて中腰になったとき、
「もう一つ報告を言い忘れるところでした。あと半月に迫っている四月の定期異動の件ですが、村津君を介護課に戻そうと思っております。異動の根拠は、村津君は改心し財産の人財になろうと努力をしています。その努力に報いてあげたい。介護課への異動によって、夜勤手当が確保され生活が楽になるのと、もうひとつは村津君の祖母が新たに入所することになり、介護に関わり祖母孝行をしたいと申し出がありました。財産の人財職員を増やすことは、経営の安定に繋がります。了承していただけませんか」
龍二は、言いたいことを一気に喋った。
「昨年の十二月にデイサービスへ異動させたばかりで、まだ四ヶ月しか経っていないではないか」
施設長は、じろっと龍二の顔を見た。ここで引き下がれば、話が頓挫してしまう。
「お言葉を返すようですが、十二月の異動は村津君に対する懲罰的な意味で行いましたが、今は改心しています。だったら本人の希望を受け入れるべきではないですか。先ほども言いましたが、他の職員たちは見ています。頑張って施設に必要な財産の人財になれば、異動でも希望が聞いてもらえると思い、職員たちの仕事へのモチベーションが上がります。逆に言えば、職員たちの仕事への意識を、村津君の異動を通して高めるチャンスなのです。了承していただけないでしょうか」
龍二は異動の説明を、力説できるエネルギーが湧いてくるのは、村津に強迫されたからだけではない。バックに美咲がいるからだ。彼女とは一時的にしろ、充実した時間を過ごさせてもらった。これからも、どうしても繋がりだけは持っていたいのだ。
龍二は、はっと気がつくと、唾を飛ばし、自分の身体を施設長の方に乗り出していた。
「今回の異動についての言い分はわかった。そこまで力説するのだから自信があるのだろう。やりたいようにやりたまえ。事務長

は、この施設の要なのだから、運営にプラスになることなら了承しよう。頑張ってくれたまえ。ただし、くれぐれも施設内での出来事の報告は忘れないように。わかったね」

そう言って、施設長は念を押した。

龍二は、安堵感を胸に秘め施設長室を出た。

今の職場環境を守るには、村津が龍二に行った強迫にも忍耐強く対応するしかない。美咲と逢えるのも、レナと遊べるのも、事務長としての地位を維持し、給料を貰えることによって成り立っている。

事務長としての職務を全うするために、龍二は『短気は損気』、『雄弁は銀、沈黙は金』、『長い物には巻かれろ』、『勝てば官軍、負ければ賊軍』の、ことわざを自分自身に言い聞かせてきた。それが勝ち組と負け組が混在する世の中で、勝ち組に残る最善の方法であると思っている。

人にはそれぞれの身分や立場に応じた暮らし方があり、それなりになんとかなっていくものだ。『分相応に風が吹く』を唱えることで、龍二は『悔いなき人生』を送れていると、自己満足することができた。

事務所に戻って時計を見ると午後三時を指していた。今日は木曜日である。ふと脳裏にレナの顔が浮かんだ。素直で可愛い彼女に逢ってみようかと思った。

土曜日の出勤だと言っていた。まだ新人だし、客の指名もそんなに多くはないはずだ。予約の受付は二日前の、特別会員は正午から、一般会員は午後六時からである。龍二は特別会員であるから、今の時間帯でも予約を取れる可能性は高い。

龍二はゆっくり立ち上がると、事務所を出て職員駐車場に向かった。マイカーの運転席に乗り込むと携帯をポケットから取りだして、発信キーを押す。呼出音が鳴り、男性が電話口に出た。

「ココナッツクラブです」

「今週の土曜日、レナさんの予約が取れる時間帯はありますか」

店員からの予約状況の返事を待つ数秒の間が緊張する。
「午後二時から百二十分コースなら空いております」
店員の返事に緊張が解き放された。
「それで、お願いします。名前は沢です」
「当日予約の時間の、一時間前に確認の電話を入れてください」
事務的な言葉に、返事をして携帯を切る。
龍二が車から出ると、頭上から陽光が照りつけた。